

寒さの嵐

各国ホームレスの今

待つ「春」は

約二十六千円（約四百十万円）を売り上げる。

さらに、寄付された中古品を販売する商店も。型は古いが、家具、電化製品、自転車までそろえる。これらの収入で、カフェでは一・二千（約百九十円）で食事を提供。宿泊所ではシート代込み一・五千（約二百四十円）で泊まれる。さらには、自活の道が整った人のためにアパートも開設。すでに十八世帯が入居し、ホームレスを脱した。

同協会の特徴は、ホームレス以外にもホームレスにならない。予備車、にも門戸を広げていること。カフェで談笑していたウテ・カーマンさん(30)は「幼稚園の保育士として働いていましたが、職場でいじめに遭って体調を崩し六年も仕事から遠ざかっていました。住居はありますが、私も道で新聞を売り、週に三度は「ここに通っています」と話していた。

ボランティアの研修生として活動を支える学生のアンネ・ンマーさん(23)は、協会設立当初は近所とのトラブルもあったそうですが、理解が進むにつれ、衣服や食料を寄付してくれるようになりました」と地域の理解に支えられている点を強調していた。(ベルリン・三浦耕寛、写真も)

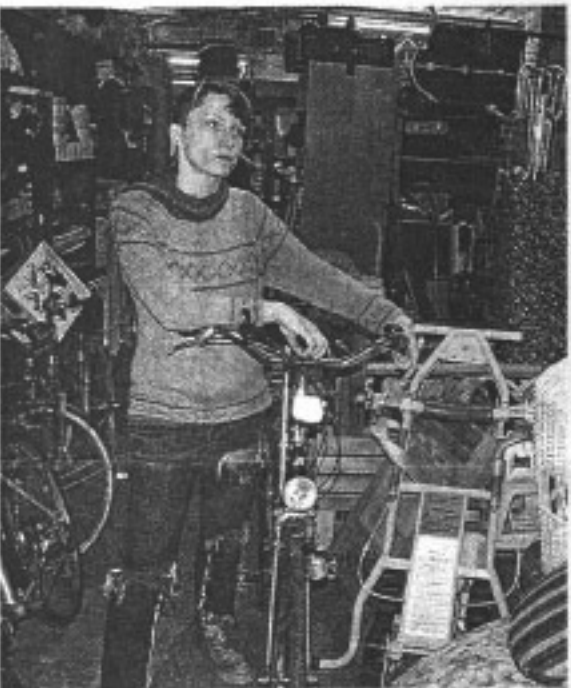
政府発表の「好況」に実感がわかない国民が多い中、公園や高架下のホームレスたちにこの冬の北風はことのほかこたえているに違いない。外国のホームレスはどんな境遇に置かれているのか。各国の当局や支援団体の取り組みを取材した。

数千の店が並ぶ商店、軒から繁盛しているカフェ、ホテル、アパートも経営し新聞まで発行。ベルリンのホームレス支援団体「mob協会」は、事業を聞けば、ちょっとした企業グループのようだった。

「mob」は「活動(モバイル)するホームレスたち」の意味。一九九四年の設立以来、公的な支援を受けず、自己収入と寄付だけでホームレスの自立を支えてきた。主力は隔週発行の新聞「シュトラ―セン・フェーガー(道掃きほうき)」。現在、約四百人が街頭で毎号二万二千部、計

ベルリン

新聞、アパート… 企業並みの事業



「お客も結構来てくれて、支店も出しています」と話すスタッフのンマーさん(ベルリンの「Mob協会」)